

〈資料〉

## 本学学生の学修状況について

中 村 泰 治 \*

### 要約

過日の学修調査によれば、本学学生は授業時間が週10コマ以上と多いし、出席率も高い。しかし、授業時間を除けば、授業に直接関係する勉強時間は週2時間以下で、授業に直接関係しない勉強時間はほとんどない。単位取得に影響のある勉強はいちおうするが、それ以外はしないというのが本学学生の学修行動といえよう。学修経験についてみると、アクティブ・ラーニングの経験はあり、その素地や成果も見られる。今後本学でアクティブ・ラーニング型の学修を拡大することは容易といえるだろう。

キーワード 学修時間、学修行動、学修経験

### 目次

- 1 はじめに
- 2 調査の実施概要
- 3 学修時間及び学修行動に関する調査の結果と分析
- 4 学修経験に関する調査の結果と分析
- 5 まとめ

## 1 はじめに

日本の大学生が、アメリカの大学生に比べ勉強しないと言われて久しい。しかし、ようやくこの状態を変えようとする大きな動きが出てきた。文部科学大臣に対する2012年の中教審答申である。そこでは、あらためて日本の大学生が勉強しないことが指摘され、他国の大学生なみに勉強させる必要性が強調されている<sup>[1]</sup>。

これは、もちろん政府のグローバル化政策の一環であり、大学の教育現場におけるグローバル化（具体的にはアメリカン・スタンダードに合わせる動き）と言っているのであるが、この動きを受けて、現在日本の多くの大学では、所属学生の学修状況について調査が行われている。勉強しない日本の大学生をアメリカ風の勉強する大学生に作り変えていく流れの第一段階として、まず現在の日本の学生のいわば情けない学修状況を、大学人の中で共通認識にしておこうというのであろう<sup>[2]</sup>。

本学でも先般、こうした動きに合わせて、学生の学修状況について調査を行った。そこで

本稿で、その報告を行うことにする。最初に調査の実施概要を述べた後、調査の結果に順次分析を加えながら、本学学生の学修状況を明らかにしていき、最後にまとめを置く。まとめ部分だけでも、本学学生の学修状況に対する共通認識の形成に資するであろう。

## 2 調査の実施概要

調査の実施概要は、以下の通りである<sup>[3]</sup>。

- ①期 間：2週間（2014年6月25日～7月8日）。
- ②対 象：総合福祉学部・こども学部の1年生及び3年生の全員。
- ③方 法：無記名式の調査アンケートの配布と回収。
- ④内 容：2種類（学修時間及び学修行動に関する調査、学修経験に関する調査）

## 3 学修時間及び学修行動に関する調査の結果と分析

まず、「学修時間及び学修行動に関する調査」の結果と分析について述べよう。質問は全部で15問であった。

○問1. あなたは1週間に何コマの授業を受けていますか。

これは最も基本的な学修時間である授業時間について尋ねたものである。1年生は90%以上が週12コマ以上の授業を受けており、3年生もほとんどが10コマ前後の授業を受けている<sup>[4]</sup>。

○問2. 受けている授業への出席率は平均すると何%くらいですか。

授業を受けるにしても、出席率が悪いと問題なので、これは問1の中身の充実度を問う質問である。1年生は90%近くが出席率80%以上と答えており、3年生も90%近くの学生が70%以上と答えている。本学は出席管理に厳しいこともあるが、全体的に出席率は極めて高いといえる。本学学生の授業を受けることに対する前向きな姿勢を伺うことができる。

○問3. 授業を欠席する主な理由は何ですか。

この質問は欠席の原因を探り、その解消により出席率を高めようと意図したものである。1年生は約半数の学生が「朝寝坊」を挙げている。次に多いのは「その他」であるが、これは交通トラブルなどではないかと推測される。ただ、3年生になると10%以上の学生が「授業内容がつまらないので」と回答しており、このことは欠席者の多い授業担当者にとっては反省材料といえるだろう<sup>[5]</sup>。

○問4. あなたは受けている授業科目のシラバスを読んでいますか。

シラバスは言うまでもなく授業の目標や内容を示したものであり、予習・復習のガイドにもなるものであって、それを読むことは授業を受ける大前提といえよう。ところが、1年生で50%程度、3年生では60%程度の学生が「あまり読んでいない」や「ほとんど読んでいない」をマークしている。これまでシラバスを読む習慣がなかったせいかも知れないが、これでは、あらためてシラバスの重要性を説明する必要があるといえそうである。

○問5. 指定された教科書がある場合、それらを読んでいますか。

教科書を読むことは予習・復習の基本であり、授業の理解度を高めるものであることは言うまでもない。ところが、1年生も3年生も「すべて読んでいる」と「だいたい読んでいる」をマークした学生は合しても3分の1に満たない。逆に、半数程度の学生が、「あまり読んでいない」や「ほとんど読んでいない」をマークしている。

○問6. 先生の指定する参考書・参考文献がある場合、それらを読んでいますか。

これは前問とほぼ同じ質問であるが、回答も前問とほぼ同じである。「すべて読んでいる」と「だいたい読んでいる」をマークした学生は30%に満たず、逆に半数以上の学生が「あまり読んでいない」や「ほとんど読んでいない」をマークしている。

以上、問3～問5の3問の回答結果をみると、全体的に言って、授業に出席する努力はしていますが、その理解度を高める努力はしていないということであろうか。

○問7. 授業の予習・復習をしていますか。

この質問への回答は上記の見方を裏づけるものである。すなわち、1年生・3年生とも「ほとんどの科目で予習・復習をしている」と「だいたいの科目で予習・復習をしている」をマークした学生は、合合わせても10%にも達しない。1年生では70%程度の学生が、3年生に至っては90%近い学生が、「あまり予習・復習をしていない」や「ほとんどの科目で予習・復習をしていない」をマークしている。やはり授業に出て先生の話聞いて、それで学修をすませているようである。

○問8. あなたはこれまでにオフィスアワー（指定された時間に先生の研究室を訪ねること）を何回くらい利用しましたか。

授業で分からないことがあった時や授業の内容をもっと勉強したい時に、オフィスアワーを利用することは効果的である。しかし、回答を見る限り、総合福祉学部では70%程度の学生が「1～2回」ないし「ゼロ回」と回答している。3年生になっても「ゼロ回」と回答する学生が40%以上いるのには驚きである。ただし、こども学部では1年生の90%が「1～2回」ないし「ゼロ回」と回答しているものの、3年生になると「1～2回」ないし「ゼロ回」と回答した学生は50%程度になり、オフィスアワーの利用は進んでいる。

なお、本学では学生への個人面談を義務付けているし、指定の時間以外にも研究室を訪問することを認めている。それゆえオフィスアワーを利用していないからといって、先生の研究室を訪ねていないということでは、必ずしもない。それにしても、授業についてあまり質問には行っていない、とは言えそうである。

○問9. オフィスアワーを利用しない主な理由は何ですか。

これもオフィスアワーを利用しない原因を探り、その解消によってオフィスアワーの利用を促そうという意図をもった質問である。1年生・3年生とも3分の1程度の学生が「オフィスアワーをよく知らないの」と回答していて、最も多い回答割合であった。これも高校までにオフィスアワーを利用する習慣がないせいかも知れないが、今後一層説明する必要があることを思い知らされる数字である。

オフィスアワーを利用しない理由として、「先生がいないことが多いので」と「先生が忙しそうなので」という回答が合わせて20%程度あったが、これは教員側の反省材料といえるだろう。他方、「先生の所に行くのが面倒なので」と「他のことで忙しいので」という回答も合わせて20%程度あり、これは学生側に問題があることを示すものといえよう。

ともあれ、オフィスアワーの利用の促進には課題が多そうである<sup>[6]</sup>。

○問10. あなたは授業時間とは別に、平均して1週間に何時間くらい授業（単位取得）に直接関係する勉強（授業の予習・復習やレポート・宿題の作成など）をしていますか。

予想していたことであるが、1年生・3年生とも、30%程度の学生は「ほとんどしない」と回答し、40%程度の学生が「1～2時間」と回答している。合わせると70%程度の学生が週2時間以下、つまり1日20分も勉強していないことになる。問7で予習・復習を「ほとんどしていない」という回答が多かったことを考えると、これも多くの学生にとって、課題（レポート作成や宿題）のためだけの勉強はしているということであろうか。

○問11. 授業で出される課題（レポート作成や宿題など）で調べ物をする時、主な情報源として何を利用していますか。

これは最近の学生の勉強方法（学修行動）を尋ねる質問である。1年生・3年生とも50%近い学生が「インターネットの情報」をあげており、30%程度の学生が「先生の指定した教科書・参考書」をあげている。逆に、「図書館で見つけた課題に関係する本」をあげた学生は10%にも満たない。図書館の資料や文献をベースにした旧来の勉強方法に代わって、簡単な情報収集で手早く課題をやっているということであろうか。

○問12. 学期末試験の時、1科目当たり平均何時間くらい勉強する予定ですか。

1年生・3年生とも多い回答は、「2時間程度」（30%程度）、「3時間程度」（25%程度）、「4時間程度」（15%程度）などであり、総合福祉学部の3年生を除き「半時間程度」という学生は5%程度である。授業への出席や期末試験の勉強など、単位を取得するための最低限の努力はしているようである。

○問13. あなたは平均して1週間に何時間くらい自主的な勉強（授業（単位取得）に直接関係しない・しなくなった勉強で、授業で興味を持つようになった勉強や資格・就職のための受験勉強など）をしていますか。

授業に直接関係する勉強でも、学生の70%程度は週2時間以下なのであるから、授業に直接関係しない勉強時間はもっと少ないだろうとは予想がつく。事実、学生の60%程度が「ほとんどしない」と回答し、20%程度が「1～2時間」と回答している。合わせて80%程度の学生は週2時間以下しか勉強していない。学生は勉強しないと言われても仕方のない数字である<sup>[7]</sup>。ただし、3年生には「5～6時間」以上と答えた学生が10%程度いる。

○問14. 授業時間以外はどこで勉強していますか。

これも勉強方法に関する問いである。1年生・3年生とも50%以上が「自分の家」ないし「自分の部屋」をあげている。総合福祉学部の3年生を除き、大学の図書館をあげた学生も20%程度いるので、図書館は勉強の材料収集の場というより自習の場として利用されている

ようである。

○問15. 授業時間以外で一番勉強する場所では、平均して1週間に何時間くらい勉強していますか。

問10と問13で尋ねた授業時間以外の勉強時間を総計すると、ほとんどの学生が4時間以下なので、ここでも1年生・3年生とも、90%程度の学生が「3～4時間程度」と答えている。しかし、「5～6時間程度」以上と答えた学生が10%程度おり、この学生たちは本学では勉強家といえるだろう。

#### 4 学修経験に関する調査の結果と分析

次に、「学修経験に関する調査」について報告しよう。通常の講義形式の授業に経験があるのは当然なので、ここではそれ以外の形式（近年アクティブ・ラーニングとよばれることが多い）の学修経験について尋ねている<sup>[8]</sup>。質問は全部で5問であった。

○問1. あなたは1週間に、ゼミ（演習）・実習・実技など能動的な学習（アクティブ・ラーニング）が必要な授業を、何コマ受けていますか。

最初に授業のうち、非講義型の授業（広義のアクティブ・ラーニング）をどのくらい経験しているかを尋ねている。1年生は1コマから5コマまで答えが拡散している。これは、アクティブ・ラーニングが聞き慣れない言葉で、意味がよく理解されなかったためかも知れない。3年生は3コマから1コマと答える学生が多いが、1コマという回答もアクティブ・ラーニングについてやや不正確な理解をしたためであろう。質問に説明不足の面があったのではないかという反省材料である。

○問2. あなたは大学に入ってから学外実習に何日くらい出かけましたか。

これは学外でのアクティブ・ラーニングの経験に関する質問である。学外実習と具体的な言葉で質問したせいか、1年生はほとんどが「ゼロ」と答えて、3年生は50%以上が「7日以上」と答えている。これは妥当な数字といえよう。

○問3. あなたは大学に入ってから授業に関わりのある資格をいくつとりましたか。

資格一般ではなく「授業に関わりのある資格」ということなので、これも大学でのアクティブ・ラーニングに関する質問である。1年生は当然「ゼロ」という回答が多いが、3年生は「1つ」と「ゼロ」に分かれている。これが多いか少ないかの評価は、大学側のカリキュラムの問題だろうから、学生側よりも大学側に課された宿題といえよう。

○問4. 大学に入ってから向上したと思う力は何ですか。

1年生・3年生とも「教科書や参考書など本を読む力」や「図書館で資料や文献をさがし出す力」と回答した学生は、それぞれ10%にも満たない。アクティブ・ラーニングの基礎になる力が付いたとは思われていないようである。

多いのは、こども学部の1年生を除き、「インターネットを利用する力」（20%程度）である<sup>[9]</sup>。また、1年生・3年生とも「先生や実習先の人など大人とコミュニケーションをとる力」（15%程度）が多い。3年生では、「自分の考えをみんなの前で発表する力」（15%程

度)も多い。「大人とのコミュニケーション力」や「発表する力」はアルバイト先で学んだ可能性もあるが、双方向性をもった少人数の授業や実習重視の授業の成果とも考えられるので本学のアクティブ・ラーニングの成果といってもよいだろう。

○問5. あなたが期末試験の後(夏休みや春休み)したこと・したいことを挙げてください。

これは、学生にアクティブ・ラーニングを受け入れる素地があるかどうかを尋ねるものである。1年生では、「自宅で大学の授業に直接関係する勉強(教科書・参考書の読書、宿題・レポートの作成、卒論の準備など)をすること」(20%弱)や「クラブ・サークル活動をすること」(20%強)が多い。「授業で関心をもった本をいろいろ読むこと」や「授業で学んだ場所や資料を訪ねる旅行をすること」がそれぞれ5%程度であることから、やはり宿題やサークル活動の方が気になるということであろうか。

3年生では、「宿題」や「サークル活動」と答えた学生がそれぞれ10%程度いるが、「実習やインターンシップに出かけること」(10%強)という回答も多い。また、1年生・3年生とも「授業で学んだ職業に関連するアルバイトをすること」(10%程度)や「ボランティア活動をすること」(10%程度)も多いので、アクティブ・ラーニングを受け入れる素地はあるといっていいだろう。

## 5 まとめ

以上をまとめると、本学学生の「学修時間及び学修行動」については、おおむね次のようにいえるであろう。

1. 履修科目数は多いし授業への出席率も高い。課題や試験勉強もいちおうやっている。
2. しかし、シラバス・教科書・参考書はあまり読まない。予習・復習はほとんどしないし、オフィスアワーもほとんど利用しない。
3. 授業時間以外の勉強時間は、課題等の授業に直接関係する勉強時間が週2時間以下で、授業に直接関係しない勉強は60%程度が「ほとんどしない」状態である。
4. 総じて「単位取得のための最低限の勉強はするが、それ以上はやらない」といえよう<sup>[10]</sup>。

次に、アクティブ・ラーニングに関する「学修経験」については、おおむね次のようにいえるであろう。

1. 能動的学修(広義のアクティブ・ラーニング)の経験はある。
2. コミュニケーション能力や自分の意見を発表する力については、アクティブ・ラーニングの成果は見られる。
3. アクティブ・ラーニングを受け入れる素地もあるので、今後、能動的な学修(自分で問題を発見し・解決策を見出すという狭義のアクティブ・ラーニングも含め)を拡大することは可能であろう<sup>[11]</sup>。

## 注

- [1] 中央教育審議会（2012年）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」、11頁～13頁。
- [2] 一般的な学習ではなく「学修」という言葉を使うのは、「大学設置基準上、大学での学びは『学修』であるからであるが、内容的にも「大学での学びの本質は・・・授業時間とともに・・・事前の準備、事後の展開などの主体的な学び」であるから、学習ではなく「学修」が適切ということのようである（前掲、中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」、2頁）。
- [3] アンケート調査用紙にあった質問項目や回答結果の数字分布については、煩雑さを避けるため、次回にまとめて示すことにする。
- [4] 別の調査では、平均履修コマ数は1年生で「13.5」、3年生で「9.6」という数字が示されており（杉谷祐美子（2014年）「私学高等教育研究所より」、教育学術新聞「アルカディア学報」556号）、本学学生の平均履修コマ数が特に多いということではなさそうである。
- [5] 別の調査でも、授業欠席の理由として「朝寝坊」と「授業内容がつまらない」が上位にあがっている（埼玉大学教育機構（2012年）「学生の学習に関する実態調査報告書」、7頁）。
- [6] 埼玉大の調査でも、オフィスアワーの一人当たり平均利用回数は「0.3回」となっており（前掲、埼玉大学教育機構「学生の学習に関する実態調査報告書」、9頁）、本学学生だけがオフィスアワーを利用していないというわけではない。
- [7] 先の調査でも、約3分の2の学生は「1週間の授業の予習復習や課題をやる時間」は「1～2時間」以下と回答し、約4分の3の学生は「大学の授業以外の自主的な勉強」は「1～2時間」以下と回答しているという（前掲、杉谷「私学高等教育研究所より」）。本学学生の授業以外の学修時間が特別少ないということではないようである。
- [8] アクティブ・ラーニングとは「能動的学修」（前掲、中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」、3頁）のことで、①従来の講義型の授業ではなく、②課題解決型の授業、ということのようである。
- [9] 別の調査でも、大学生になって身についた力として、「パソコンで文書・資料を作成する」や「インターネットで情報を集める」が最上位にきている（丸山和昭（2014年）「福島大学2年次生の学修行動」、『福島大学総合教育センター紀要』16号、41頁）。
- [10] 学生に「単位取得のための最低限の勉強はするが、それ以上はやらない」という傾向があることを前提に、学生に勉強させる処方箋を書くことはある意味で簡単である。それは「十分に時間と労力を費やして勉強しなければ単位の取得や好成绩は望めないという状態」（前掲、埼玉大学教育機構「学生の学習に関する実態調査報告書」、41頁）を作り出せばいいのである。ただし、この種の処方箋は日本の大学の風習を変えるようなもので、当面「言うは易く行は難し」であり、実現には相当の時間がかかりそうである。
- [11] アクティブ・ラーニングについて「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修」（前掲、中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」、9頁）という説明もある。難しい大問題に正しい解を出している大人はごく少数であろうが、発見する「問題」の質量を問わず、見いだした「解」の正否も問わなければ、「主体的に問題を発見し解を見いだしていく」といった知的作業は、自立した普通の大人なら日々やっていることである。逆に、人の話を毎日90分間×複数回、緊張して聞いているような大人は、まずいない。そういう意味で、アクティブ・ラーニングとは、学生を大人扱い（アメリカの大学生なみに）して、普通の大人が日々やっている知的作業を大学の学修としてやることと解釈することも可能であろう。ただし、こうした能動的学修が、本当に21世紀を生き抜く力をもった大人を増やすのか？これは、アメリカ型社会の評価にも関わっており、難問と思われる。

## Summary

### An Analysis of Study Conditions of our Students

Yasuharu Nakamura

Most of students in our university take more than 10 courses a week and attend them almost regularly. But they respond that their study hours related directly to the courses are less than two hours a week and their self-imposed study hours are few a week. This may mean that our students make minimum study efforts to get necessary credits but do not make any more than them. Students of our university gain some experiences of active-learnings and get a few good outcomes. It will be easy and useful to expand active-learning courses in our university.

**Keywords** study hours, study actions, study experiences

(2014年11月20日受領)